第廿一年　統一　二月號

（第二百六十四號）

課題和歌谷梅發表……子尋　清岡長言
信念の啓發と策勵……大僧正　本多日生
我本尊觀と生死觀……海軍中將　宮岡直記
日蓮門下對各宗の法義大抗爭
の起因は村上專精博士の宣言……松尾皷城
に含まれたり……熊井鷺城
村上博士の兩上人の對照に就て……一記者
スタール博士と日蓮主義……山根青村
機微譚語……笹川日堂
宗門史考……窪田純榮
十七字詩法門……戸水萬頃
謠曲中の法華經……
祖師日蓮聖人御傳……一記者
統一俳句……統一團報……其他數件

發行事務取扱所　東京小石川白山前町　統一編輯所
振替口座東京三三五三三番

（第二十一年一月卷）　「統一」　（第二百六十三號）

▲初版賣切○○○
△二月上旬再版○○

大僧正　本多日生著
法華經講義　全二冊

▲洋裝菊版總布上製函入美本
上卷　壹圓八拾錢（壹千頁）
下卷　壹圓八拾錢（壹千頁）
●各卷分賣す
●二冊の小包料（內地二十錢、滿洲朝鮮五十錢、臺灣樺太四拾錢）
●一冊の小包料（內地十二錢、滿洲朝鮮四十錢、樺太臺灣三十錢）

大僧正　本多日生著
第一版、二版忽ち賣切三版
日蓮主義
三五判洋裝金文字入▲天金縞函入美本▲紙數六百二十餘頁
▲定價九拾五錢　郵稅六錢
▲宗教の必要と其撰擇▲神儒佛三教と日蓮上人▲國民道德と宗教の信仰▲破佛論に對する批判▲統一的佛教觀▲釋尊の出家成道▲佛教信仰の體系▲法華經講義▲日蓮主義の梗概▲修法次第▲方便法▲自我偈▲自調▲本統組文要文
●賣り切れざる中に申込あれ
申込所　東京市小石川區白山前町　統一編輯所
振替口座東京三三五三三番

日蓮各宗　寺院　御僧
法衣　草木
京都　三條通烏丸東入ル町
直に御聯想下され候儀に候

恭賀新年
草木店
電話中七三五番
振替口座東一一五五九番
淺草區三好町二番地

恭賀新年
草支店
電話下谷三四三四番
振替口座東二四五六八番

相變らず御引立奉希上候

謹賀新年
安田主人敬白

●○○○○○○○○○○○○○●
○日蓮各宗本山御用達○
○京都市寺町通六角西南角○
○念珠商　安田商店○
○二百數十年日蓮各宗の念珠を商ひ來り候老舗に候御信用の上御用命願上候○
●○○○○○○○○○○○○○●
各位の萬福を祈る

賀正
不相變乞御引立
●苟も神佛具を調製する敬虔心を以て奉事仕候●

佛像佛具
位牌木鉦　調度所
宮殿憧天蓋其他一式
▲普通品定價郵券弐錢封入送呈
總本山身延山
總本山妙滿寺
大本山本願寺
日宗各教團
御用達
京都寺町四條南大雲院前
舊名「乾清」事佛師
辻井岩次郎
振替大阪八一五七番
電話下三二五八番
多少に限らず御用奉願上候也
●御用仰せ被下候はゞ叮嚀深切を旨と致候●

奉賀新年
御念珠各種
弊店の特色は實用を旨とし從來調進仕り候へば多少に不拘御用命願上候
市都市寺町通蛸藥師下ル
念珠商　小野嘉助
振替口座大阪一九七二〇番

（東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍印行）

▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英西郎△印刷人鈴木日雄（▲本誌定價一冊八錢郵稅五厘▼）

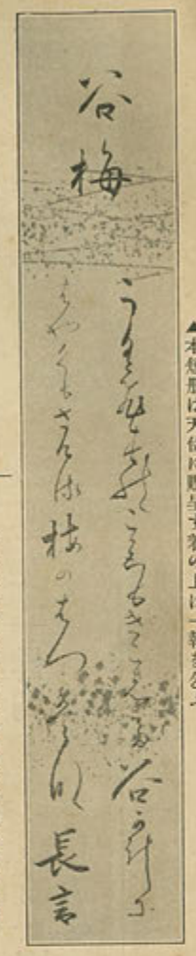
明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正六年一月十五日第三種郵便物認可
統一事務取扱　東京市小石川區白山前町　統一編輯所

△次回題課（八切二月末日）『海邊春風』投稿規定

▲本短冊は天位に贈呈す着の上は一報を乞ふ

一紙用半紙半切

一書一題一人三首迄とす。字體は正しく認（他用書くべからず）め一枚毎に必ず住所姓名を記すべし



和歌『谷梅』

子爵　清岡長言選

摩耶ケ嶽はゆきにさえつゝ日おもての谷間の梅はいまさかりなり　播磨　森下　照巷

山の上にのぼりて谷を見おろせば白く光りて梅の花咲く　山武　小川　只助

谷深くすみの衣も着ふるして梅咲く春を幾世經ぬらん　長生郡　岡田　榮良

ちらり〳〵降りしを雪とおもひしは溪間の梅のちれるなりけり　日本橋　窪田　貞二

幾年か人知れすこそ咲きつらめ深山の奥の谷の白梅　淀橋　吉澤美香子

昔誰か住みけむあとか谷かけの屋敷の跡に梅の一本　淀橋　高橋卯三郎

陸の奥の如月寒し谷の梅の蕾も見えす雪にうもるゝ　陸中　村上　彦一

月ケ瀬はまたほと遠くきゝなからおもはぬ谷に梅を見るかな　播磨　森下　馨

なりはひに結ふ谷間の葬家の軒にも梅の春はにきあふ　潤井戸　梅澤　莊夢

流れ來る谷間の水に香のするはこの川上に梅や咲くらん　上總　成島　龍北

ほとちかき谷間に木こる音すなり梅ひとむらはゆるせやまかつ　備前　原田　日男

そま人の斧の響も打ちたへて夕暮れかすむ谷川の梅　成東町　堀江得一郎

影うつる梅の匂ひやこほれけん木の間をくゝる谷川の水　大阪　長尾猶之助

たきゝこる賤もかをりをしたふらん谷間〳〵の梅なこそみめ　本所　勝田　宜和

賤の女の柴に添へ來る一枝は谷間の梅の音つれと知る　窪田　純榮

里なれはいくらの人の見るものをたに間に惜しき梅のはつ花　東金町　笠見音太郎

近けれは手折りて君におくらましはや咲初めし谷の白梅　大阪　南　みね子

咲き匂ふ今をさかりと谷の梅峯の嵐にちるそをしける　越前　森川　茂

春淺き谷の川水打濁り梅の花のみ白く流るゝ　青森　宮田　黄雲

世のさまをおはむともせぬ谷の庵にはるをまつしる梅のはつ花　下谷　小柳　英夫

消え殘る雪かとみれはは風にかをりをおくる谷の白梅　市原　中村　操

○佳句

鶯の鳴く音墓ひて谷かけの梅に一日をくらしけるかな　名古屋　有田　麗陽

谷川の峯の白梅花咲きて木傳ふ鶯の影もうつれり　山武　並木　うめ

谷川の水に姿を寫しつゝ長閑に匂ふ梅の初はな　山武　並木　博

谷あひに一もとかをる梅のはな清き流れにかけをうつして　淺草　篠崎　芳子

雪のこる深山の谷の岩かけに春をわすれぬ梅のはつ花　小石川　松尾　周

尾上なる殘りの雪もかなるまてはやさきにけり谷の梅かな　遠江　佐原　弘風

人里を離れし山の谷深み春やとひけん梅の花さく　淺草　山根　日東

人とはぬたにゝたゝよふ梅のかのうちよりきこゆうくひすのこゑ　十二歳　松尾田鶴女

去年の雪また消えのこる谷かけにはるをしらせて梅かをるなり　丹波　内山　昌雄

谷底に花は見えねとふく風の匂ふは梅の咲けるなるらん　越前　秋葉　純一

氷りゐし水もぬるみて谷かけのかけひのそはに梅はにほへり　京都　中野　正甫

こきのぼる利根の小船に薫りきぬ香取の山の谷の梅か香　下總　星野　聖祐

冬なれと寒さわすれゝ熱海路の谷にゝほへる梅の初花　京都　竹本　蓮一

○人

世のちりを知らす顏にも匂ふかな人里遠き谷の白梅　千葉縣長生　渡邊　乾航

○地

雪はまたきえぬ谷間も春めきて清き流れに梅かをるなり　牛込　竹廼舍

○天

佐男鹿の路たに見えぬ谷間にもはるのこゝろの通ふうめか香

統

信念の啓發と策勵

第廿一年二月卷（第二百六十四號）

本多日生

一　緒言

信念の啓發と策勵に就て組織立てしお談をしてみたいのでありますが、それでは時間が大へん永くなる。そして割合に聽く人が骨が折れる、凡そ宗教のお談は何もさう學者振つてする必要もない、つまり此方の胸中の誠を吐いて其れが聽く人の精神に通じて感動を起し之れをして眼醒めしめ而して信仰の住地に到らしめればよいのである。故に本日は是から再び二階の方で講話（大乘要義の中大法蔵教の講話なり）を致しまする都合上、三十分間位に切りちゞめてお談を致しまするから豫め御承知ください。

二　宗教信心の危急時代

現今一般の信仰狀態に就て私の感じて居ますのは、何故今日人々の信仰が地を拂はふとして居るか、一般人に信仰心が起り惡ひか、而して如何にせば此の人々をして信仰心を發さしめ得るやであります。見わたすところ現今の宗教に對するありさまは不思議の現象を呈して居る、人は元來宗教信に生くべきが至當であるのに文明人と稱しながら却つて宗教信が後しざりをして居るのである。宗教は如何なる時代に於ても如何なる國に於ても即ち野蠻の國に於ても進歩した國に於ても存在して居る。然るに今日の世界のありさまは宗教は只形式にのみ存在して其實質は死灰の狀態である、殊にそれが日本に於て甚しいのである。有史以來今日ほど宗教信の傾いて居る時はない、或は人類あつて始めての事かも知れぬ。此の

爰に至つたのは何か原因があらう、而して此責任を負ふべきものがあらうと思ふのである。

三 進行の常態に反せる宗教の現狀

前にもいふ如く宗教は人間の存在する限り當然また存在するものである。其文明と野蠻、地の東西を問はないのである。日本でも一番古き時代は宗教の事ばかりである。元政治は宗教と一つであつた、それから政治が分れた。元來宗教から政治も哲學も出るのが當然である、凡そ此等は皆宗教の子である。宗教は即ち人類文明の總本家といつてもよい。故に政治でも道德でも宗教から離し得べきものではない。必ずや子なるものは親に似る筈である、宗教が純正なるものであつて政治道德其他が純正であるのだ、若し親に似ぬ子があつたら鬼子である。

人間は生れてから少年から青年、壯年、老年となるのである。之れが人類の歷史狀態である。人も母の腹の中で二月三月ではハッキリ人間の形をしては居ない、豕の子だか犬の子だか分からぬ、病院などへ行けばアルコール積などがあるが素人では見わけがつかぬ、それが七八月になつて來れば人の形をして來る、人間もさういふところから出發して來る、最初はこんなものて之れが段々進んて行くのである。人も子供の時は物を壞す、盜みの心を出す、野蠻人に似て居る、それが段々善惡を見わくるやうになるのである。これが人類の進歩の狀態である。この人類の歷史の如き狀態を以て人間の思想も發達するのである。然るに何故に宗教のみが、あとしざりをするか、宗教心を起さぬやうになつたか、これは或は人爲的に此に至つたか、然らばこの人爲的は碎破して改めしめねばならぬ、制度のわるいのであるなら其制度を改良せねばならぬ、この爰に至つた弊害を除去せねばならぬのである。

四 心の二方面と宗教

人間には心の動くものに二方面がある。一は上に向ふのと一は下に向ふのとである。之れを向上と墮落と云つておかう向上は自ら進んて行くのである、心に張りをもつて力め進むのである。此心は誰にもある、試に子供に對つてお前は此風呂敷包は持てまいといへば何んの持てぬ事があるものかとウンと氣張る、私は楠正成が好きだ、乃木將軍が好きだといふやうな心もそれてある、しかし其良い心の切々なるものを整頓すれば宗教心になるのである。之れを調理整頓して絕對の本格に向つて進めしむるこれが契へば宗教心が調養されて世に宗教は勃興し活力を有することになるのである。而して一方には墮落、なまける、これが宗教心とは遠ざかつて行くのである。卽ち心には一方に勉强心があれば之れをさまたげる懶惰心がある。又一方には頽敗して行くを引留める奮勵心がある。一は向上し一は墮落するのは之れに依つて分るゝのである。此の頽敗し墮落し行く心を引留める、向上する心を奬勵する、其處に宗教力の働きが認められねばならぬ。

佛性と魔、この二現象が善惡二道の分岐點である。邁レ情表レ德、これは人としては間違つたことは直し、善い方へ進まねばならぬと云ふことてある。

五 信仰と決定不動

凡そ人として信仰心のないのは人格上締めくゝりがないといふことてある。信仰心のない人には實際の力も作もあるものてはない、人として眞に重きをなすには宗教は尤も大切な必要物てある。極言すれば宗教心なき人は幾ら偉くても實は胴骨の缺いやうなものてある。宗教信仰とは決心をつけて進むといふことてある。フラ〳〵て進んては駄目てはないか、信心とは今身より佛身に至るまて能く持ち來ると誓ふのてはないか、死すとは佛身に至るまては決して動搖せないと決心するのてあるから、一度此決心がつけば動くものてはない。捨身決定といふのも同樣の意味てある。身を殺して而して目的の決定地に到達すゝ不動心が信心といふのてある。佛のみ前に禮拜をする、その時に掌を合せる、十指を合せる、これが心の動かない赤誠の表白てある。日蓮聖人か生命を輕くして弘法したを不思議がる人もある、聖人の生命を投げ出して法を弘め給ひしところに代表的宗教性の現れを見ねばならぬ。

六 智情意の上に超絕したる宗教心

人間の精神を學者が三つに別けて居る、一を智とし一を情とし、一を意として居る。しかし之等の三つは大概底の知れたところを基礎に置いた見方である、之等智慧も今日滿足したるものも明日になつて足らざることを悟つて動搖する。又情にしたところが、始終ガラ〳〵と變化をする。意志といつたところて、或る一つのものが得らるれば一寸滿足して、進行も中止するといふ形てある。個人的に小さく滿足するものを求めて居るからつまらぬ、萬人共通的に其處に貫通した宗教性質のない智情意の價値は粗ものてある。古今に通じて誤らず、中外に施してもどらない決心信念がなくて何て完全の人といへやうか。信念は實に人の一身を堅に貫いた自覺てあつて且つ貫いたものを頭の上に保持されて墮落失墜せざる堅釘てある、即ち世間道德になき力、即ち此以上に强い力を有するものといはねばならぬ。

七 警めに眼醒めて

宗教信仰の本質は如上いふ如く決定的精神てあるが、兎角グラッキ易い、日蓮聖人は眞ものてゞざれば動き給はぬが末輩は似せものがグラッキたがる、其處て朝夕お勤めをするにも三寶の御前に端座して鉦を鳴らす、卽ち心に警めを與へて

不動の決定心を運行せしむるのである。鉦をカンとたゝく、其の鉦の音は、即ち慈悲滿ち智慧耀きます佛陀が鉦を打ち給ひて我々のグラック心に警めを與へ給ふものとして氣附き目醒め、驚き戒めて決定の眞信に歸るのである。

八 佛教と誓願

凡て宗教の信海に入りたるものは誓願、別の言葉で即ち心願を立てなくてはならぬ、今日の言葉でいへば理想目的とてもいふのであるか、しかし誓願とか心願とかいふのは一段と意味が深い。日蓮聖人は虛空藏菩薩に日本第一の智者にならしめ給へと誓願を御立てになつた而して遂に達し給ふた。日蓮聖人ばかりではない凡そ偉い昔の宗教家は皆誓願を立てた傳教大師の誓願の一條は川船のことを忘れてならぬといふのである。川に浮んで居る船は油斷をすれば下に押し流される。船頭が岸に上つて曳いて行く、少しも油斷はならぬ、少し油斷をしてもあと戻りをする、此心を以て宗教弘傳者として立たれたのである。孔子にも斯かることはある、孔子が語つて曰く、田舍の五軒十軒しか無い村の中にても二人や三人の自分等位のものは必ず在る、只私は終始奮勵努力して今日をなして居る、即ち滾々として川の水の如く晝夜を休まぬから今日を爲して居る、晝夜を休まない生きた誓願の實行は彼の大をなして居るのである。

誓願々々といつてもスカタンなものは困る、願波羅密もよいが、力なき輕い願ではつまらない。阿彌陀の四十八願とか藥師の十二願とか是等のものゝ中には力のない願が多い、又佛の名號さへ稱へて居ればいゝやうな力を拔にしたものでは眞の願にならぬ。殊に阿彌陀々々々といつても幾らも積類がある。小說にお花といふ名が幾らでも出來て居ると一つである、しかし其實質、生立、修行は違つて居る、それを一つにしてはならぬ。汪然觀覽あたりの誘惑に誘はれてはならぬは其處である。願とは他人にばかりたよらず己れも信力を起して遂行することである、其人の心の中に潛んで居る願力を出さねばいけない、幸田博士が何かで云つて居た、女はよく『くれ〳〵も〳〵〳〵』もとこんなやうな事を同じく重ねて書いてをる、其だ親切らしいが、さて嫁にしてみると朝寢はする、家庭を治めることは知らぬ、洵につまらぬ、故に口や筆でいふよりも實行をせねば否ぬと。宗教の方でも同じことで只ありがたい〳〵〳〵〳〵といつて居ただけでは何の事もない、我々が眞に佛教者として完境に立つには立派な力ある願を立てねばならぬ。願とは活きた力である、南無妙法蓮華經と一日唱へるにも其裡に强大なる願を藏し力を藏せねばならぬ『我々は今尊き國日本に生れた、如何にもして日本の爲になりたい、我々は佛陀の教に入つて居る、如何にもして此道の爲に盡したい、而して此れには此れだけの誓を立てやうそして此の誓は決して破るまい』といふやうに屹とした願を立てるのである。凡そ人間は或る願を立てるところに前途に光明の燦たるものがあつて之れが人生の面白味にもなる此の願が慰めの力ともなるものである。

九 小願は迷信に陷る宜しく大願を立てよ

日蓮聖人は一大誓の上に樂んで居られた、一度佛教の統一旗幟を立てられ、此の大願の上に生命を顧ず、一々法華經の身讀に切々として其の生き甲斐あるを欣ばれたのである。であるから『日蓮は何時も嬉しい、樂しい、法悅身にあまる』と仰になつて居られる『法悅自愛』とは聖人の精神に云ひ切れぬ悅びを形容された言である『我の懷の中には春の風が吹いて鶯が鳴いて居る、他には其れが解ないが、自分には愉快に堪へぬ』とのお心である。されば塚原の三昧堂に簑を着、笠をかぶつて其れて以て『日蓮は日本第一に富めるもの也』と遊ばされた所以である。

道德といふも積極的に心に悅びを有て願望を立て、行くところに之れも備るのである。孔子は即ちそれである。佛教の戒律僧が消極的に消え入るやうな哀な氣で沈み行きつゝ道德的の事をいふても其れは自己の强大なる力を沒却するのみならず社會の爲には却つて有害になることが多い、釋迦如來はその一切經を通じて徹覺するときは彼等が如き消極的な戒乘はない、哀聲な弱音は吐かれておいでにならぬ、笑へよ、よろこべよ、進めよ、悲しむことなかれ、といふやうな意味の上に立つて說かれてある。それでないと大誓願は貫けるものではない。凡そ宗教は惡をとめ善を表す目的の上に實に悠久なる長年代を貫いて行かんとする大行である。ゆゑに大きな誓願を立てゝ佛に結びつけて行くのである。若し小さい願になると迷信になる、眼を治してください、鼻を治してくださいといふやうな小さい願ひは迷信に陷つて來る。何も佛様に賴むのに眼や鼻ばかりを賴まなくてもよい、遠慮はいらぬから身體全部を賴むがよい、身體ばかりでなく心も賴むがよいそれも自分一人でなく家内一同を賴むがよい、大きい上にも大きく賴まねばならぬ、願を大さく持つといふことが佛身に至る大切な注意點である。

十 結言

人として大切の事は信仰を得ることである、他の事は信仰から見たら低いものである。人生の實を得るといふことは宗教心に歸入することに外ならぬのである。

宗教心の結果は絕大の佛界に昇るのであつて、其處に行くまでの香薰を人生にのこさねばならぬ。

佛教の信仰といへば六ケしく考へるものもあるが畢竟簡單なものである、釋迦如來それから日蓮聖人此の系統に現れた正しき信條にとりすがればそれでよい、それで我々は此日本にあつて皇室をいたゞくといふことは愉快である。かく感じて大きく願をかけ生命のある限り佛教に盡せばよいのである。

（校閲を經ず文責在記者、又繪の見出しも記者が勝手に挾んだのである。鈴 城）

我本尊觀と生死觀

△愛孫を失ひて佛性の融交と信仰の力を發見されたる述懷談

海軍中將　宮岡直記

(一) 序言

私は昨暮愛して居りました、孫を亡く致しまして何となく悲嘆の情に迫られて居り、喪中でありますから宮中の御儀式も御遠慮申しあげて居る次第ゆ玉野口僧正に事情を申して出席は御辭退致しましたが、然らば其愛孫を失つた感想を談したらばとの事に止むなく出席致したのでありますから、元より談話に構想のある筈もなく、只孫を亡くしたる愚痴と悲嘆とを述懷する位のもので、御笑草に過ぎないかと存じますから、豫め御斷りを申しておきます。

(二) 悲嘆中に眞の解味

一休が云つたと申しますが『門松は冥土の旅の一里塚めでたくもあり芽出たくもなし』祝すべき中に其半面の思考を促したものであります、人生は如何にも一面のみの觀測に終らずして其又反面をも考覈するところに味があるので、悲嘆の中にも一の眞味を了解することを得るのは宗教信の力でありませうか。

(三) 因果の法と不斷の生命

佛教の教では人間は一生で盡きない、死々生々の間に永久の存在することを認識して居るのであります。佛教は因果の規定を教の生命として居るので、人にして因果が信ぜられないやうでは既に佛教の信者とは云へないのであります。此の因果の大法は世間常識の上からも當然の道理でありまして、而して此の因果が繼續聯絡して、生々世々磐きない力となつて居るのであります。私は專門家でありませぬから詳しいことは知りませぬが、私の人生觀としては因果の大法に依り永久の實在を得、又宇宙の宏大も此の因果の大法の業因の力に支配されて居るものと存じて居ります。

(四) 大我と小我

それから人間は自分一人でなく、自他共通し關聯して生をなして居ると思ひます。即ち此の衆生はお互に靈の交渉をして居るものと存じます。一歩進めて申しますれば人間は皆本佛の分性に活きて居るもの、假へば大きな桶の水を無數の皿に分けても之を戻せば皆元の一水となるのと同じであらうと思ひます。人間は此の理に基き各人各個の形體を備へて居ても、根元は一であるのが、只各個に分れて居るから、別々に個人の感にとぎられて居るのである。

(五) 歸命本尊

前に矢野閣下が本尊に對して、呼吸のお談がありましたが、寔にその通りで、私等が御本尊にお辭儀をするのは御本尊に歸るのである。御本尊は即ち不滅の佛陀で、而して自分等がその御本尊に歸向し奉るのは即ち分盃の水から元の桶に歸るところである。この時に躬自ら御本佛の慈悲の御手中に歸つて居るのであります。

(六) 國と法、萬流一歸

我御本體の美しさことは言ふまでもなし、建國の理想は勿論の事、教育勅語の如き只我等の日常忘るゝことの出來ぬ、身實であります。而も其肇國に絶大の因緣を含み將來無限の繁榮を意味して居るのは愉快に堪へぬ次第であります。しかし如何に國が美しくても之れを保持し興隆し行く因緣を完全に契持せしめねばならぬ、國も亦一個生きて居る人の如きものて佛教の因果の理法に規準して興隆するのであるから、其資するに足る力、即ち佛教の本旨義に依りて培養され、或は之と契合合致して其目的を達するを得るとしたならば佛教の眞實義の力は卽ち我國の本有の力として喜ばねばならぬ、我維神の道は尊い、今日誤りたる教會神道でない我本有の眞神道の本旨が、不思議にも佛教の本義、即ち法華經本門の旨義に合致冥合して王法佛法の契一の基を認めたる時に、我佛教は天竺よりの渡來でなく、荒いこなれない佛教でなく、本佛實體の體現たる教旨の一に活きて居る清き一流の教、一大海の本に歸を示した教とした尊卽措く能はざるものであると思ふ。此意義を明にせられたる師日蓮上人は亦尊むべきて、其旨義の根原を開示されたる釋迦尊に對して一層尊意を表さねばならぬ。此に於て御本體より分れたる自分の意味も判然するのてある。縱に横に因緣業果の力も認めずにはをられぬのてあります。

(七) 生死二處の交渉

私は思はず宗教義の談に入りましたが、此處て始に還りします。凡そ人間は必ず一度は死ぬる、親子、兄弟姉妹、何時か一度は別離せねばならぬ、かくて人間は愛別離の悲みに煩惱やる瀬なく沈むのてある。しかし此に醒つて考へて見る、死んだ者は其れ切り死して歸らぬが、靈も無くなつて消ゆるか、イヤ決して死なぬ靈も無くならぬ、それて、其の靈と此方の靈とが何か交渉がなくてはならぬ、一たんは別れる、別々の感も起るが、其共通の處は、其の底の力は、融通交渉して居るものであらねばならぬ。往きたものは早く本佛に歸つて居るのである。然らば我等も其本佛に通ふことが出來るのてあるから交通は開けて居るのてある。かく觀じてみれば佛教信仰の光りが輝く私の信仰するおかげは、嘆きも嘆てなく悲みも悲みてない、一人の孫は往くも其處に動かぬ安心と慰安がきらめくのてあります。是に於て人間は互生の關係、三世を通じて活けることゝ、本佛の佛性、我々の佛性、彼此の佛性は相交渉して存在し、子は亡なつても親に在り、親亡くても子に在り、かくて人生の永久の生命の存在に歡喜の情を催すのてあります。

（要領筆記、意味相違のところあれば記者の誤なり）

日蓮門下對各宗の法義大抗爭の起因は村上專精博士の宣言に含まれたり

一記者

▲序言

僧侶の村上精專氏は本願寺から出た人であつても、博士の村上精專氏は學者の態度を失ふ人ではあるまい、それは博士が產れた眞宗に對した從來の態度に於ても知られて居るので、可なり信用せずには居られなかつた。然るに舊臘十二月の『哲學雜誌』の『親鸞日蓮兩上人の對照』の出るに至つて意外の觀に打たれた、其日蓮上人の性格等を觀ることが恰て新聞記者が其半面を推測して無責任な筆を弄するものと餘り差異して居なかつた。『深密傳』を作つて陰險な手段を以て日蓮門を傷けんとした念佛門を畑として生へた人には、矢張り此忘はしい思想は堂々たる博士の榮冠を得ても尙斷つことが出來ぬものかと寧ろ村上博士を氣の毒に思つて居たところが、突然中外日報一月廿八日以後三回に亘りて『親鸞日蓮兩上人の對照に就て』の一文が揭げられた。此文を見て流石博士は正直な人だと思つたのである。同文には赤裸々と同論を發表する迄の心情經過、及び其誤解ある議論であつたことを告白して之れを取消されたのである。而して尙日蓮上人の研究を遂行して完全なる評論を社會に發表すべき由を豫告されたのであつた。其の要點を拔いてみると

『吾輩はどういふものか日蓮を研究する氣になれぬ』

『蓋し是れ日蓮宗の人が、所謂四箇格言の調子を以て何宗となくサンザンに罵倒して開かれた宗旨であるから他宗の人は例の食はず嫌ひに陷つたものと見える、しかしながら是は學者の弊風なりと謂はねばならぬ』

『處が昨年の秋以來吾輩の心風一變した、日蓮を研究せざれば日本佛教を研究すといふべからず』云々。

『處が吾輩の親鸞上人に對するや恰も生みの親に對する如く、又日蓮上人に對するや恰も初對面の人に向へるが如し。』

『之に加ふるに吾輩と雖も從來日蓮上人の遺書を全く讀まざるにあらず、多少は讀んだこともある、然るにたゞ之を破らうと思ふて讀んで居た、缺點を見付けんと思ふて讀んで居た、公平の眼を以て著者の眞意を探らんとするやうな意は一向なかつた。』

『處が今度は從來の心を一變し、之を相改め、なるべく日蓮上人の人格を究めんとして（中略）大略を通讀し來つて從來の所見に多少の誤解あるところを發見した、之に依つて舊臘兩處に於ける講演は多少不穩當な所も全くないとは云はれぬと思ふから之を一時預りとなし他日を待て之を解決せんとす』

これて『哲學雜誌』等の博士の筆言はマア〳〵一時預りといふので取消されたのである、ところが、此に容易ならぬ未來に對する宣言を同文中に受けて居る、博士にして眞に豫告を實行されて他日研究を發表さるる日がありとしたら、雨か其何れかの打ち出し方に依つて我佛教界、否日蓮主義に對する佛教諸宗派の一大對抗が起り、少からず社會の耳目を惑くてあらうと思ふ、そこで特に此長たらしい前文を置いて一文を草して之れを博士に呈し併せて我宗門の人々に警告しておくのである。

▲日蓮と各宗とは双立せず

博士は哲學雜誌に揭げられたる一文がはしなく緣となつて、再び遺文錄を通覽された結果、更に又一層日蓮主義の研究の必要なる所以を發見したりとして左の言をされて居る。

『論理上に於て、諸宗成立すと雖も日蓮宗必ずしも成立せざるにあらず、然るに若し日蓮宗眞に成立すれば諸宗孰れも皆成立すべからざる所以を日蓮上人遺文錄の上に於て看破したり』

かくて博士は附言して曰く、

『既に事を看破したる以上、苟くも學問に從事せるものは、何人によらず須らく之を研究し、正々堂々、公明の解決をなすべき義務あり、是れ實に學者の責任なりといふことを自覺したのである。』

更に附して、

『各宗の碩學高僧諸師、これを奈何となすか』

と一般佛教界に警告までされて居る。

博士が俗な感情より醒め『吾輩も亦研究未熟であることを自覺して居る』と告白して、さて博士の所謂ザラリと遺文錄を通覽した中に重大な該事件を發見されたのである、而して、『是より更に之を熟覽』した結果は、必ずや博士は其報告を齎らせるであらう。博士曰く、

『今後進んで益々研究せんと欲する所であるから寧ら研究終へて後、悠然として、或は講演に、或は著書に、正々堂々論ずべきところは之を論じ、改むべきところは改むることにした方がよいと思ふ、其時は果して雪になるか、雨になるか、此は今より豫想すべからずである』

其結果は自身の博士より豫想が出來ぬのであるから他から何とも云ひ得らるゝ事は出來ぬが、私は爰に何れかになつて現はるゝ時を假りに豫想して見て、而して其時の教界の反響は何うてあらうかを謂つてみたい。

▲博士が日蓮主義が立つと見た時如何

さて若し博士が、日蓮宗が成立するが當然である』といふ結果を得て之れを大膽に社會に發表したとすると『諸宗は孰れも成立すべからざる所以』も明にさるゝものとして此に博士に對する佛教界最大多數の反擊に襲はれねばならぬ。此

場合を想像して其時の博士の武者振は日蓮以後七百年間になき壯觀を極め、男性的な言葉の戰鬪が現はるゝ筈である。何と云つても博士は念佛の畑から生れた人である、食はず嫌ひ、蟲の好かぬ法華ではあるが、主義の共鳴から博士が公明な正陣を張つて念佛教を向ふに廻したりとすると、此位社會を驚すことはあるまい。日蓮門下の驚き、眞宗は勿論の事、各宗が驚の目を見張ることは見るが如しである、或は念佛門下から暗打をくらふかも知れぬ。（書しから義に敵した人は窮鼠猫を噛む仕事として極つて居る）しかし一世の學者が之れを恐れて口をつむぐやうな卑しい處作はあるまいと思ふ昔日蓮逝いて百年、叡山の能化、玄妙は日蓮の遺書開目抄如說修行抄の二本を繙いて多年の疑問一時に晴れ、涙と共に、其人在らざれども其主義に歸伏し、自ら日蓮の弟子日什と名乘り法華を宣傳して後に六百の精舍を贏ち得た。今の妙滿寺は其孤蹤である、日什が改宗の時にも天下の學者を驚かして、日蓮門下にすら疑惑の眼を以て見られ、一派の人からは將に生命を奪はれんとまでしたのである。しかし其時代と今日とは人心の異るものもあるから第二の日什を見ることは出來ぬ迄も、正直なる博士が若し日蓮立宗の正義を認めた時には天下の驚き而して後代より眺めた時には大きな此の局面の展開が如何に面白く映ずるであらう。

▲博士が日蓮主義を否とする場合

然るに之れに反して博士の研究が『日蓮の義立は不當である』と日蓮主義には不利であつたなら何うであらう。久しく對外的に無事に苦しんで居る、同主義者は勇猛の姿、武者振一番して獅子吼の反哮を試るであらう、しかし此場合博士の後景には眞宗は勿論、淨土眞言等の最大多數の影武者がヨッショ〳〵と後援するであらう、さりながら今の日蓮門下は德川幕府時代の日蓮門下とは違ふ、否二十年前の四箇ヶ言問題時代の門下とは違ふ、大ぶん素養のあるものも多くなつた信者も活きて來て居る、各門下の疎通も多くなつて居る、前面に立つ闘士も餘程よくなつて居る。而して之れが動機になつて、他宗にも日蓮主義の眞相を知らせるに便するであらうし、又、主義の勃興に就て大なる導きとなるであらう。

▲何れにしても博士の態度の強烈ならんことを欲する

右の次第であるから、今回博士の研究の結果は雪でも雨でも孰れでも日蓮主義者には強い力の一つを投げ與へられることになるのである。其研究は一でもよい二でもよい、成るべく強く色彩を帶びて現れることを欲するドチラッカズのアヤフヤなものでなくて、砂糖にあらずんば石といふやうに明瞭と東からでも西からでもよい横綱の剛勇が現はれるやうの態度にして貰ひたい。

▲腕を扼して待て

其處で我日蓮門下の覺悟であるが、此博士の孰れかの態度に依つて諸氏の新らしき勇姿を示す舞臺は一つ殖える、平靜微笑して其樣の迫りつつあることを樂んでおいてよからう。

▲眞超の義氣

尙博士に申しておきたいのは、眞超の事であるが、彼れは傳說に依ると、其當時日蓮の氣魄地に墮ち、惰氣滿々、之れを見るに忍びず、即ち『破邪顯正記』を著して毒鼓を鳴らしたのである。果せる哉、彼れが忠良なる苦策は種々の反駁となり、日宗氣風頓に振起す、渠れ其病んで亡びんとするや、反駁書『金山集』の題名を見て莞爾として逝いたといふことである。蓋し金山の名は猪摺金山に基いて居るからである。彼は元日蓮宗の僧であつて、立派な日蓮主義の著述もして居るのであることを。

▲村上博士の兩上人對照論に就て

蕉井鷺城氏書翰

村上專精博士の『親鸞日蓮兩上人の對照』に就て、本月四日紙一閑に於ては熊井講師之れに對して評論を試みらるゝ豫定の處、はしなくも博士の中外日報紙上の『預り文』を讀みて之を中止し、其報告だけに止められたり。その件に就ては本誌松尾記者まで所感を寄せられたるが、記者また同紙を讀みて一文を草し既に本誌に掲出すべく印刷部に渡されり。而して二人の所論其前半の如き殆ど同じやうの筆致を見たれば今は重複をいとひ只其末段のみを掲げて熊井氏が義に望切なる所以をのみ紹介す。（一記者）

松尾鼓城道兄足下

（前略、但し熊井氏は博士の日蓮宗他宗不兩立の看破せりの意義を論じたる上更に語を强めて）然候はゞ博士は將來日蓮研究の結果、若し日蓮宗成立したる曙は如何致され候や、潔く博士多年の主義信仰を放擲して懺悔改宗いたされ候哉、斯るお伺ひを申上げては甚だ失禮か、されど小生としては止むべからざるものあればに候、蓋し往年博士が其高著佛教統一論に於て「彌陀釋迦同體なるにせよ娑婆の吾人は釋迦牟尼の名に依るを適當とする」とて幾多の壓迫をも退けて其所信を拋げ給はざりし當時の壯觀よりも、此は幾百倍の壯舉にして而も大丈夫の正に踏むべき大道なると共に、更にまた幾千萬倍の大難事にて候ふべく、茲に幸に日蓮聖人の一語を捧げ申度候

智者學匠となるとも地獄に落ちて何の詮かある」

賢正なる博士に對し此上何事を申可か（後略）

▲お札博士スタール翁と日蓮主義

先年東海道を膝栗毛で旅行した米人スタール博士は今月上旬山陽道を旅行したりしが、左の記事が二月七日の大阪朝日に掲載されて居ることを見ると博士は多少なり日蓮主義を聞いたことがあるのかも知れぬ。

（前略）

後樂園を一巡して唯心山上よりその風光を賞した後蓮昌寺に俥を飛ばし大覺師の曼陀羅同寺の寶物たる日像師の南無妙法蓮華經の大曼陀羅が

博士の好愛する日蓮の教義

を中國に布教する時に旗印としたと云ふ五百五十四年前のものにて七十五枚の紙を綴合したものだが七十五枚共に一として白紙なく昔池田輝政侯が幾度も之を眞似たが思ふやうにならんで遂には筆を折つたと傳へらるゝものである大阪以西の大寺だけにスタール博士は感を拵へること夥しく云々。

青村

二五、理想と現實

原田甲斐は怪傑なり、伊達兵部の顧問となり其子市の正宗高をして、宗家六十餘萬石の青葉城を乗取らしめんと、秘策奸計益々出て丶愈々巧みに、太守綱宗を酒食に耽らしめ、押込隱居となし、御曹子綱村を毒殺せんとして事露顯れ、精忠無二の伊達安藝と對決の結果、一敗地に塗れて姦惡不忠の惡名を千歳に流せしと云へ、幼名雉之助の時代は、機智縱横逝ばれ什侯風諫の美擧をも奏しける。斧は綱宗天資頗る器用にして彫刻に妙を得夢、となり國政を抛ち、その白彫の作物を近臣侍者に與へて得々然たり、甲斐一日侯に謁し、太守は彫刻に堪能なり、されど雉之助拜見する所形樣は能く出來たれども兎角精神が這入り居らず、所謂佛像作つて開眼未濟と申すもの、見る所如何にも立派なれど、とんと役に立ち申さず、何と申す若年とは云へ怪しからぬ言ひ分、何て予の彫刻が役に立たん、左樣左甚五の彫りし馬は草を食み、龍を刻めば池水を呑む、是れ眞に魂が這入り居る故なり、拙者抔も同樣、ナニ其方も彫刻を致すか、未だ其方の彫刻物を見た事なし早速此處にて彫て見せよ、イヤ手前一人にて彫りしとてお慰みにもなり申さず、願くば太守と其手腕を比較申さん、イヤ面白い何を彫るか、何ても彫ります然らば鼠を彫らん、夫は結構手前鼠は最も得意に候と、日を定めて彫刻に取掛る。一方太守のは如何にも立派に出來上る、雉之助約束の當日袱紗につゝみて忝しく持參、如何て御座ります御約束通り出來ましたか、子は疾く出來て居る是を見よ、拜見仕ります、恰かも生けるが如し、成程太守は御器用なり併し魂が這入て居りません、何て左樣申す、さん候心の這入た證據には手前持參の品は猫に見せれば必ず喰はん、なれど太守のは猫が咬へる氣遣ひなし、ツム然らば試さん誰かある猫を呼べ、猫來る飛び掛つて咬へんとしたが、木彫の鼠ニャンとも云はず捨て去る、御覽近ばせ雉之助の彫刻をと袱紗を開き忝しく太守に呈す、見れば眞黑々の一物頭尾だも見分け難し。雉之助是は隨分不細工だナー、イエ細工は不手際でも魂が這入り居る故猫必ず喜びます、斯なものを猫が咬へやうや、恐らく鼻も引掛まじと其處へ投げ出す、何ぞ知らん猫唐突に飛び掛つて喜んで咬へ去る。如何て御座る御降參遊ばしたか、どうも奇態なり、併し今のは餘程黑かりしが、抑も何の木を用ひしか、手前のは節にて候、ハア檜の節か黄揚の節か、イヘ蟹節にて候、けしからぬアノ此處な横着物奴と叱し給ひしが、驚つて其當位即妙を賞し、此者

多智一廉の用をなさんと重く用ひて、金穀元締役則ち奉行を命じたりと。（仙臺實錄）

萬事は實際的こそ貴とけれ、此場合徒らに藝術的問題を提出するを止めよ、技巧如何に妙を極むるも實用に適切ならざる、至竟閑人の閑左右のみ、時間を貴び實用を重んずる今の世には適せず。宗教亦然り、華嚴の十玄六相眞言の三密瑜珈さては天台の一心三觀抔、其理如何に高妙なるも餘りに現實界とは沒交渉なり、金剛法界宮に晝寢を貪る法身の大士ならば兎に角五濁の惡世荒凡夫の吾人々類を救濟するには、間に合た談道にあらず、さりとて如何に手取り早やとは云へ、一向現實界を厭離して夢幻の淨土を欣求する淨土教も其弊毒恐れざるべからず、如何にしても時機相應佛に成る道は法華經より外に無きなり、如何にしても空論を避け現代を救濟する妙道は日蓮主義より外に無きなり、則ち先づ生前を安んじて更に沒後を扶くる日蓮主義こそ、人類最後の宗教なれ、法華を識る者は世法を得べく、理想と現實とを併せ全ふする大教は、一念三千の玉をつゝみし妙法五字のを謝せよ大法値遇の幸榮を。

聖語　設い山林に交りて一念三千の觀をこらすとも、空閑にして三密の油をこぼさずとも、時機を知らざれば爭てか生死を離るべき。（閑目鈔）

二六、誠懶惰懈怠

一時佛支提國に住し給ひき、時に惡龍あり菴羅陀と名く、兇暴にして人畜を害す、人其處に到るなく牛馬諸鳥も其上を飛ぶことなし、莎伽陀尊者大勇あり、彼の惡龍の住處に到り端座定に入る、大龍瞋恚を發し身より火炎を起し來り逼る、莎伽陀三昧に入り神通力を以て大火炎を出して之に應ず、毒龍いよ〳〵瞋恚を强め身より毒煙を出す、尊者亦猛煙を出す、龍身より糞を降らし霹靂を放ち弓箭刀杖を雨らす、尊者亦その如くす、龍種々の神變を現ずれば尊者隨て之を現ず、龍勝つ能はず合掌して莎伽陀に謝して曰く、我れ汝に歸依すと後佛弟子となりぬ。然るに尊者ある時酒を飲み、歸路寺門に近づけるを知らず酩酊地に倒れ伏す、蚊虻群り襲ふ而も不覺不知鼾聲雷の如し、如來之を見て諸の比丘に告げたまはく、莎伽陀よく大惡龍を制伏すと雖も今や蚊虻の爲に制せらる、聖者猶ほ飲酒の爲に是の如き失あり況や一戒未斷の凡夫をや、今より已後佛弟子たるもの飲酒すること莫れと。（五戒相經）

文單に飲酒を禁ずるが如くにして、而も懶惰懈怠を誡むるの意充溢せり、酒を飲めば精神時に興奮して、氣荒く情紊れ諸惡競ひ起る、之を數々すれば靈性麻痺し意識昏昧にして、事を爲すに勇氣乏しく放逸となり懶惰懈怠となる、愼まざるべけんや。特に佛子化導の大任を帶ぶ、經に當に精進して一心に常に智慧を勤求すべしと說き、精進の鎧を被堅固の意を發すべしと示し給へり、豈寸毫の懈慢を許すべけんや。先聖賢哲忠實に道を弘め衆を化し、檀越信徒化に服して寺觀を壯にし田園を寄附し、依て以て今日に至る、然るに今の僧徒多くは懶惰を貪り精進の

（一四頁下段につゞく）

宗門史考

笹川日堂

緒言

經卷相承は本宗の宗脈である、經卷相承の宗脈は釋迦牟尼佛宗祖日蓮上人の精神を繼紹宣明したるものである、佛教超勝の教義は法華經で、その如來壽量品に顯說せられたる久遠實成と事の一念三千の法門は、一代樞要の教義にして日蓮上人が「壽量品ましまさずば天に日月なく家に柱なく人に魂ひなからんが如し」と斷定せられたるに徹しても明かなる事實である、本門の本尊本門の戒壇本門の題目所謂宗旨の三箇は釋迦牟尼佛の大精神を顯影せられたるに外ならないのである、經卷相承に憑りて日蓮上人は立教開宗せられた、この立教開宗は日蓮上人の大精神にして、宗門あらん限りはこの大精神を顯揚することに努めなければならない又日蓮上人の教義を信ずる我等弟子信徒たる者はこの大精神を感孚して殉教の至誠を活現せなければならないのである、「佛の御意は法華經」との日蓮上人の妙法蓮華經日蓮の魂は南無ち釋尊の大精神が三世一貫して生命あることを示されたのである、久遠實成事の一念三千の妙致が永久に活きて居るのも此に證明せられたと思ふ、歷史の眞價もまた此にある、この意味を徹底せずして歷史を談るなら、歷史は萬年曆を播くと同じく何等その心核を認むることは出來ないのである、古來往々萬年曆的に宗史を語るから、則ちその教團の生命と活力を減耗して氣慨なき節操なき寄生蟲が多くして賽錢財施に齷齪するを能事とするが如き不祥事が現出した、畢竟するに原始的立教開宗の主張は永久に末徒眞俗に感孚活現せざるよりおこる弊害である、這度吾人宗門史を概說せんとす、庶幾くば讀者諸君、宗門の興廢消長の跡を考慮せられ、先聖の大精神を感孚し信行の華果を收め給はゞ幸甚。

▲一三頁機微譚語つゞき▼

勇なく、酒食に溺れ圍碁に耽り、偶〻文字に親むとすれば雜誌に氣觸れ小說に沒頭し、仰臥天井の節穴を數ふ、何の顏色ありて佛祖に見えん、當に慚愧懺悔猛然として三省すべきなり。

聖語　此經文を見ん者自身を恥べし、今我等が出家して袈裟をかけ懶惰懈怠なるは、是れ佛在世の六師外道が弟子也と佛記し給へり。（佐渡御書）

贈於鼓城松尾兄併乞政

山田喬齋

彰義重情是此人
人間最慕記恩新
功名意氣共難貴
何物加鹹使泣神

十七字詩法門

窪田純榮

柚柿も拜まれにけり御命講　芭蕉翁

▼佛教の言葉にては宇宙の萬象を二大別して有情非情と呼ぶのである、その有情と謂ひ非情と名づくるものは、如何なるものであるかと謂へば、有情とは知覺を具へて居るもの、則ち人畜魚介等の一切の衆生を指し、非情とは草木瓦石のやうな知覺を持て居らぬものを、概括して呼ぶ言葉であるが、更に之を簡明に謂へば、有情とは心のあるもので、非情とは心のなきものである。

▼此の有情と非情とに就て、依正の二報と謂ふて、離るべからざる二つの關係がある、その一は有情の爲に依て來る果報則ち山河大地又は飲食衣服の類、之を名けて依報と呼び、それから二の正報と謂ふのは、我等衆生の身肉手足、及び種々なる境を緣して、發動する生物の精神を謂ふので、一切衆生が所作の業因によつて、受たる正しき果報そのものである。

▼試みに之を例せば、地獄の衆生の正報には、猛炎と鐵杖とが依報となり、正報の佛菩薩には、金蓮臺や淨土が依報となるやうに、必らず此の依正の二報は、十界の一切衆生についてまはるので、人間には家屋と衣服、畜生には魚骨殘飯、正報の受る果報によつて、依報がそれ〴〵異なるのである。

▼私は冒頭に芭蕉翁の俳句を揭げた、之は日蓮聖人の御會式に御報恩の法味を捧げ奉りし時、甘糟紅葉を以て飾られたる御寶前の、如何にも淸く美くしく莊嚴せる、其壇下に拜跪した瞬間に、偶然浮んだ古き記憶である、それを幸ひとして題題と爲し、御法門の一端を述て見た、それは俳聖芭蕉翁が、柚子と柿とが拜まれたと詠みて、之を逢磨忌や十夜に結ばずして、「殊更日蓮聖人の御會式によんだのは、大に見る處があつたのではなからうか、前にも謂ふたとほりに柚子と柿の實は則ち非情の草木で、依報の部に屬すべきものである、其上に拜んだり拜まれたり、出來べき筈のものではないのに、拜まれにけりと治定したのは、翁の大見識の然らしめたのであらうと、私は思ふけれども、今は之を忖度すべき必要なければ、何れにしてもよしとして、少しく私の感懷を陳る事としやう。

▼拜んで見たところで柚子と柿、如何に鰯の頭も信心からと、諺に謂ふたにしても、利生のあるべき道理はない、然るに其物が拜まれたと詠んだ、その拜まれたが大に意味あることで、私は感興を惹起されたのである、之を唯だ柿を拜んだ柚子を拜んだとせば、無識何でもなき事ながら其拜まれにける事柄が、甚深微妙の法門に與合して居る、翁はそれを十七字詩に、吟詠したのではなからうか。

▼草木國土と謂へば、柚子や柿も此の中に包容して居る、其草木國土のやうな非情に、佛果に至るべき本能たる種子、則ち佛になるべき本質の佛性が、具はつて居るとか否具はつて居らぬとか、隨分異論のある問題である、それは佛になる本質の佛性は、唯だ草木を除くの外は、一切のものに具はつて居る、否眞如の理性は情非情に通ずれども、佛性を開覺することは、唯有情のみに局るべしと、又は草木に佛性ありと謂は可なるも、能く成佛すと謂ふは大に不可なりと、或は草木には盧知の心を備へず、豈發心修行の義やあらんと、亦發心修行は斷惑證理の爲である、然るに草木には既に煩惱無し、斷迷開悟の義やあるべからずと、復た非情の草木にも修行成佛の義を有すと、更に無情有性を信じて、無情成佛を疑ふべからずとか、實に諍論縱橫異議紛々で、其底止する處を知

るに苦まねばならぬ。

▼法華經の方便品を拜するに我始め道場に坐して、樹を觀て亦經行すと說かれてある、之は如來が道樹の下に座して、三菩提を證得せられた事で、觀樹と云ふのは樹の恩を感ずるが故に觀察し、經行と云ふのは、地の德を念ずるが故に、經行すると釋してある、之を小權の教意より觀れば、分別の情盡を持て居らぬ樹林大地に、恩か感じて德を謝するの要はないのに、佛陀が樹の恩を觀察せられたり、地の德を思念せられたのには、何等かの因由消息が潛まねば、ならぬであらうと私は思ふのである。

▼よし名字ばかりにもせよ、法華經已前の諸經に於て、有情の成佛は、談ずれども、非情である草木國土の成佛は、說かれて居らぬのである、尤も中陰經には一佛成道して、法界を觀見すれば草木國土、悉く皆成佛すと說かれ、或は寶積經には一切の草木樹林、心無くして如來の身相を具足すと說けるも、之は草木國土の理具を謂ひ、又は如來所證の觀見に約したるもので、全たく成佛とは謂はれぬのである。

▼更に進んで法華經より觀れば、方便品には諸法實相と說て、宇宙の森羅三千の萬法は、實相眞如の妙理なりと爲し、又世間相常住と說いて、緣起の諸法則ち萬有は法位なる實相の本體に住するが故に、衆生及器世間の相も又常住であると、されど之は迹門の理觀であつて、未だ本門事觀の妙義に達せぬので、則ち理の常住說である、之を換言せば理想的の常住論で、事實的の常住說ではない、それは法界の萬有宇宙の現象は實相の當位に止住して、事々物々は、緣起相續し、連續的に其存在を絕たず、又毫も減損加除の差異なく、世間の本相は寂然として、常住不變であると、說かれたのであれども、未だ無始事常住なる、佛界の實在を明さゝれば、眞如の妙理に還元し歸入するのである、故に滿然尊者は世間の言に、凡聖の二類、因果の二法、依正の二報、皆悉く矯し盡されてある、然らば則ち此等の諸法は悉く皆常住佛性ならざるはなしと、論斷はせらるゝもの丶、それは法性の理の常住を、消釋せられたに過ぬのである。（此稿未完）

謠曲中の法華經（七）

戸水萬頃編

（十一月よりつゞく）以つて遊戯すべし、汝等此の火宅より宜しく速かに出て來るべし。

通盛

「鳴門の海の「弘誓深如海、歷訪不思議の奇緣によつて

觀世音菩薩普門品第二十五、偈『弘誓の深き事海の如し劫を歷とも思議せじ、

五十展轉の隨喜功德品

隨喜功德品『亦隨喜して轉敎せん、是の如く展轉して第五十に至らん、

龍女變成も聞く時は、云々

提婆達多品第十二『龍女の、忽然の間に變じて男子となりて、』

願ひも三つの事の

警諭品第三、偈『當に三車を以つて汝が所欲に隨ふべしと』

「如我昔所願「今者已滿足「化一切衆生「皆令入佛道の

方便品第二、偈『我が昔の如き新願の如き、今者已に滿足しぬ一切衆生を化して皆弘道に入らむ』

祖師御傳 日蓮聖人

涕涙石

清證寺にては藥王麿は學問に勉めておいでになる、一方、里方小湊の貫名では子思ひの母梅菊どのは、年尙いとけなき子の如何にしつる、さぞかし父戀し、母や床しと小さき胸を焦しやせんなど案じもしつ、しばし遣はねば顏見たしと、一日山をお訪ひになりましたが、此山は其頃女人は五の障のありとて中途より上には上ることを許さなかつたのです。止むなく路傍の石に腰うち掛、便をもちて之れを通じたびて、此にて久々にて母子の御對面があり、母は我子見て嬉しさなつかしさ潸々と泣ばかり。此時に麿は、既に己の學び得たことなどもの語りして、或は慰め或は告げ、さま〳〵にいたはられ、此にて愛き袂を別ちて母は泣くなく家路に歸り給ふたといふ。今其處に涕涙石といふがあり、其山に詣づる人の當時を思ひ出し、涙を絞る種となつて居るさうであります。

文暦元年甲午、上人十三歲、九條院崩後白河上皇崩△嘉禎元年乙未は十四歲、攝政敎實羅道家代、僧圓爾宗に入る△二年丙申十五歲△三年丁酉紀元一八九七年、十六歲道家羅兼經攝政、蒙古の兵ロシアに入リモスコー、キエフを取る。

剃髮

嘉禎三年丁酉藥王麿は十六歲となり給ふ、頃日もはや學問も餘程進んで居る、十月八日道場を淨め剃髮の儀式を擧げられた、道善法師はみづから導師となり、藥王麿は御聲もいさぎよく、樂恩入無爲、眞實報恩者の文を三遍まで唱へ上、かくて翠の黑髮は剃落され、紅白の振りの袂は墨染の袖とあらためられたのであります。此より御名を是生坊蓮長と呼び改めになりました。

日本第一の優婆塞の講習會

統一閣に於て毎月日曜日を以て開催されて居る講習會、之れを『講妙會』とい

ふ。幹事の岩野直英氏に會つて模樣を聽く、岩野氏にこ〳〵として語つて曰く『本會は明治四十三年夏頃の發會にして、當時は小笠原長生君其他三四の同志最も熱心でありました、其後春秋八年、今日の盛況を見るに至りました。之れといふも講師が本氣に本會に盡さるゝ御蔭であります、優婆塞の講習會としては、其永續の上に於て、不斷の常講として蓋し日本第一でしよう』と愛嬌的に氣焰を擧げらる、目下講師本多師は法經華眼に映じたる大乘要義の講義をされて居る、尙近來出席なきも舊く會員として本會に功勞あり且つ熱心なりし人は法學博士山田三郎辯護士吉田珍雄、海軍中將石橋甫氏等其他の諸氏なりと。目今會員左の如し。

大正六年一月出席會員

小原二正恒　陸軍少將
矢野茂　檢事
松本有信　海軍少將
佐藤鐵太郎　海軍中將
宮岡直記　海軍中將
久富鶴太郎　辯護士
三崎庸　大藏屬
小笠原丁　美術家
廣瀨龍次　海軍造船中監
岩野直英　海軍造船大監
小關三平　商船學校教授
中山長明　海軍少將
栗山新吉
天野操三　陸軍大尉
岡田淳司　陸軍大尉
小西左平　列事
伴錦二
飯村穣
永島巖
龍勢貞治
牛奥劫三
諸岡甲松
森數馬　海軍造機中監
小川三知　農學士
市川德二　日本銀行員
實業家
學生
濱中濱太郎
市原卯之助
平岡龜雄
增田名古四郎
大瀧正寛　陸軍大尉
板倉松太郎　列事
渡嘉數直山戸　美術家

勞働者慰安會

統一閣に於ては例年の通り一月十六日午後一時より勞働慰安會を催したり、此日閣の內外は一見樂しき歡樂境の意匠になりたり裝飾美しく、豫て待ち構へたる勞働者男女老若定刻前に早くも錐を立つ場もなくつめ込みぬ。高木庶務閣會の辭に亞ぎて餘興の演臺は開かれる、柳家小三治君の落語、豐竹絹子孃の義太夫（寄附）、桂文左衞門君の變相（寄附）、續いて東家雀松、東家小雀君の浪花節ありて、多衆は平日の勞苦を忘れ、醉える如く欣びの眉を開ける折りから、會主本多日生猊下は急報の如く拍手に迎へられて登壇、懇切なる慰安の辭に慈愛ある法話を加へたる簡短なる講演あり、亞て『我等の覺悟の題下に海軍中將佐藤鐵太郎閣下の講演あり、謹嚴の態度を以て忠君憂國の至誠に盈ちたる談話をつゞけ勞働生活の意義を知らしめられたり。聽衆は眼耳の歡樂につぎて精神の修養を得喜びに堪へざるものゝ如く、かくて再び餘興に移り、本化畫家として知られたる遠坂精華君其他の淸元（寄附）、幷に豐竹富司孃、三味線鶴澤愛吉孃の義太夫、ジャグラー光一丈の奇術數番ありて、五時半閉會す來會者千人以上にして閣外にあふれたり、右は我統一閣が社會事業の一として一回は一回より効果を收めつゝある事業の一也とす、當日此擧を贊せられて寄附されたる人は左の如し。

一金拾圓也　宮岡直記殿
一金五圓也　中澤平五郎殿
一金貳圓也　土肥某殿
一金壹圓也　聖城秀尊殿
一金壹圓也　加賀の乙殿
一金壹封也　三村友藝殿
一金五拾錢也　某女殿

（高木本願報告）

●噫若き信者

高矢武男君（松生）

大正五年は横山藤吉氏、小西刀自、窪田利兵衞氏、京藤義應氏の愛子、田岡典章氏、藤井昌風氏、畫伯青山、岩本榮之助氏、天川三藏氏、伊藤延二氏の母堂、桃中軒雲右衞門丈、奧山霜猿氏及其愛子、宮岡中將の愛孫、佐藤中將の愛子、山口醫學博士、上村大將など我同信者又は親友知人の死亡するものが多く、今年は殊に自分の知人にのみ不祥があるのかと位思はれた。殊た自分の恩父と嬰兒の逝去は自分の心に少からず悲しみの響を受けて今も尙傷みを覺えて居る折から、又々義弟高矢武男君の病逝ば義母より其際の模樣の通知を得て胸底に何ものかの强い響きを聽いたのであつた。同君は十年已來顏を合はせないが、性質溫和にして篤學、自ら敎育界に盡すことを誓はれて居た。數年前大阪の子に向つて綿々情切なる手紙を與へられたことがあつて、其後一度會ひたいと思つて居たが、其儘にして先ごろその逝かれたのを知り、寔に遺憾に思つて居たが、只其眞信仰に入り心死生の外に立つて美しき臨終のさまを知つて、僅かに光明の一途を展いたのであつた。母堂が予にたまはりたる書信に依れば、

同人は常に佛敎信念深くして法華經に歸依し居り、大正元年病氣にかゝり候て學校を退き候後は數多の佛書をしらべ、又病床にありても種々の佛書を枕邊に置、幾度となく熟讀いたし、死と申事にもよく覺悟致し居、此度臨終の際も、寔におとなしきものにて、私にもきこえぬながらも題目を唱へ、一期の別れをなし、看護婦にも禮の心をのべ、そのまゝ目をつぶり合掌して死に至り申候（中略）彼は和歌の道はいとうとく候へども臨終の前日折々に思ひ出でしこと書留めせしめしこと左のごとくに候。

生死は定命なればいかにせん、たゞ御佛に身をまかすのみ。

こゝろをばたゞ本尊にまかせをき鷲の御山へ旅立ぞする。（以上二首臨終二日前）

やみふしていとゞ樂しさまさりけり鷲の山路の近しと思へば。

受けがたき人の身を受けあひがたき佛の道にあふぞ嬉しき。

爪上の土の身を受け一眼の龜の浮木にあふ心知かな。

うきことの重りてこそ御佛のめぐみの深さおしししられけり。（此の外數種）

●堺の村上うの刀自

一身が皆信心の結晶

一時大阪堺あたりて顯本の姑といつた

ら、すぐと村上のお母さんと知られた人之れを四箇格言の折は鈴木充美氏と共に原告側（妙滿寺管長）の代理人として其不當を鳴らして天下の耳目をあつめた村上貞藏翁の未亡人である。昨年夏和泉の堺から病臥中の野老日刀師を下總に訪はれたなど優しい情に充ちた人である。曾て生師講愚會の出來た時は真先に奔走して數百圓の法服を本多猊下にお布施する、引つゞいて川崎英照師に法服の布施に就て奔走役となるなど、名を後にして身を前にするさま京都大阪方面には無くてならぬ、篤信の老母、資の篤三郎氏家を繼ぎ時計業を營み、たみ、信雄、忠、保、禮女の諸子はそれ〳〵家を立てゝ子孫繁榮信心は親から引ついだ魂ゆるがず、南無妙法の功德に活きて今世の華報めてたし、さぞや未來の果報も疑ふべくもあらず、刀自名は宇野、歳六十二歳、本多管長から逆修を得て護法院妙常日資清大姉出すところの寫眞は上、故貞藏翁、下らの女也。

▼二十六頁寫眞參照▲

●日蓮主義青年會

同會發會式を廿日午後六時統一閣樓上講堂に於て擧行ぜり、高木庶務の發會の辭、木村講師の挨拶及び講義、井村講師の挨拶及日蓮聖人の教義綱要の總論、本多總裁猊下の講話ありて茶話會及び會則の協議あり十時散會、申込會員七十八名、出席六十五名、尙會員增加の況勢なり。

日蓮主義青年會々則

一本會は日蓮主義青年會と稱す
一本會の目的は日蓮主義を讃仰し現代青年の爲めに堅實なる信仰を涵養し向上自覺の針路を示すに在り
一本會は統一閣總裁本多日生猊下を以て總裁とす
一本會々員たらんと欲するものは幹事に申込み承諾を經るを要す
一本會々員は會費として毎月金二十錢を納むべし
一本會は毎土曜午後六時より八時迄定例講義を開く但し時宜に依り臨時會を開くことあるべし
一本會定例講義は統一閣總務井村日咸師日蓮上人の教義綱要（一ヶ年續講）統一閣講師木村義明師の日蓮主義初歩とす
一本會會場は淺草區北清島町十四番地統一閣とす
一本會に幹事五名を置き會務を處理す
一本會幹事互撰を以て會計掛二名を定め本會の會計なる司らしむ會計に關する報告は毎年六月十二月の二回とす
以上

●本化聖典研究會

本多日生、田中智學の二氏を顧問とし清水梁山氏を會長講師とし、特別協贊員に各教團の管長喜多村日修、嶋村日正、阿部日正、丹治日樑、本多日生、釋日解、藤平日學、佐藤日柱、鵜岡日旺の諸氏を推擧し、其協贊員は本化門下の僧俗を通じて名士約百名を推擧し、日蓮主義の下に於て其の聖典たる法華經並に御遺文の學究的研鑽を目的として生れたり、毎月百二十頁内外の冊子を發行して一般に頒布する由なり、事務所は東京青山南町七丁目十二番地、講義所は當分東京府荏原郡大崎町字谷山三六地にをく會費一ヶ月三拾五錢、主幹松原加久太氏なり

●日蓮宗義講習會

第一期講習會として高等批判『日蓮正宗の教義一班』を研究することゝなれり、講師は田邊善知師にして會所は東京市外大崎町大崎館、既に一月二十一日の初講終り、二月十一日、二月二十五日何れも午後一時に始り三時に終る由、五百名聽講を許す、聽講料一回一人十錢、日蓮正宗の僧俗には別に特典ありといふ、申込東京市外大崎町居木橋二〇六日蓮宗義講習會。

●天晴會

東京天晴會新年賀頭の集りは一月二十日午後三時半より上野精養軒に開かれたり。

開會の辭　佐藤中將
傳教大師に對する日蓮聖人の態度　姉崎博士

●地明會總會

日蓮主義青森地明會は一昨日午後三時より中島旅館に於て新年會兼總會及び近く東京に轉住すべき會員石村氏の送別の會を開催せり出席者三十餘名にして中村鎌蔵氏開會の挨拶を爲し大本尊奉迎遺文朗讀大本尊奉送の後會計庶務の報告幹事二名の補缺選擧あり阿部秀三、鈴木新吉兩君當義次いで會員有志の所感に移り中村幹事は日蓮宗の教理を解剖し日常心得へき八ヶ條の事項を說明し西氏も亦氏の研究を發表し宴會に移り中村氏の挨拶石村氏の謝辭にて獻酬數刻散會せり。

●吉備親交會

備前備中備後美作の吉備人にして日蓮主義者の親交を目的とせる會合第一回を去る一月廿二日午後四時より統一閣樓上和室に開きたり。

●地明會

十六日の定例日は慰安會を催したれば十八日に初講を開くことになつた。此日朝來の降雪に加ふるに寒氣烈しく婦人の會合日なれば集りも如何と思はれしに、意外にも多數の集合にて本多猊下の『家庭と信仰』の談話にて後茶話會ありて五時散會したり。

通信は心ず十七字に、そして分りやすく、書て下さい。場所又は姓名は草書では校正の時に間違ひます。報知先は、東京市小石川白山前町一七統一編輯所でないと、記者の手に入るのが遲れます。

●統一閣

統一閣は近來聽衆の多くは全く日蓮主義を隨喜し、敬虔の態度を持し、多數の常講者を得るに至りしは全く講師諸君の熱心に由るものなり。

●統一閣日割

三月講演日割左の如し

三月	四日	本多猊下	石塚師　松尾師
	十一日	同	小西師　石川師
	十八日	同	井村師　熊井師
	廿五日	同	野口師　松本師

●一月初講　十四日午後一時半公開。當日は初講の事なれは滿堂の參詣者なりき。（眞信仰を購ふべき代價）松尾鼓城。（慈むべき子）井村日咸。（新年と宗教）本多日生。

●日曜講演　（廿一日一時半開會聽者九十名）、（信念と功德）、高木本順。（日本國及日蓮主義の使命）、野口日圭。（那先經の大要）、本多日生。

●青年團布教　（廿八日後一時半聽者百二十名）、（日蓮主義の經緯）、古谷幹夫。（古き思想より）、長谷川義一。（青年の勇氣）、松本敬晴。（感應道交）、今成日誓。（青年と宗教）、本多日生。

●品川　大正六年に入りて品川方面宣教の光景は正法護持會、妙道會その他の家庭布教等活躍なしつゝあり而して一月二十一日午後一時より當町妙蓮寺に於て開催せられたる養德婦人會は參聽者約百五十名淺尾清造君「開會の主旨」を述へ、松本布教師「日蓮上人の史實」の題下に日蓮上人の言行を叙說し、笹川僧正は「日蓮上人の女性觀」と題して該博適切の講話をせられ、終りて上田廣子孃の「忠孝美談の涙花館」ありて化益甚深にして參聽者何れも法說に浴せり」

●本光寺　住職今成日誓師毎月廿七日一回も缺さず開演す、常例となりて聽者少からずと法益多大なり。

●千葉縣

●長柄青年會　千葉縣長生郡長柄村青年會月五回講演一月分下の如し▲一月十七日於六地藏岩代宅。（御國體に就て）吉井光。（時局と青年）山田誠心。（言易行難）河野見中。（三德）渡邊乾航。▲廿日於別所東光寺（一年の計は一月にあり）山田誠心。（修身處世の道）渡邊乾航。（御國體に就て）吉井光。▲廿一日於味庄常光坊。（年頭所感）山田誠心。（至誠心）河野見中。（信は道の源）渡邊乾航。▲廿五日於上野妙典寺（信仰と努力）山本賢乘。▲廿九日於力丸香田寺。（教學保險に就て）山田誠心。（至誠心）河野見中。（獨立自尊）渡邊乾航

●市原　一月十三日正午より市原郡温津村下野本泰寺に於て新年初講演會を開催す、當日は毎年初講義と稱し開催すれど本年は一層意義あらしめ開演せり、先づ住職吉田純賀師の開會の辭あり、次に星野純義師の「今年は巳の年」の題下のもとに聽衆は何れも腹をかゝへて大笑、第二席には「人生と信仰」尙「國民道德と祖先崇拜の意義」と題して長廣舌あり、講演後餘興として「法華利生記、法の光」と題する涙花節等あり、午後五時閉會す來聽者約四十六名なり會後一同祝宴か開き散會す。

●東金青年夜學會　本會は數年前より東金高等小學校内に設立せられ、毎週火、水の兩夜、中島校長始め各教員諸氏、學科か分擔熱心に指導せられ、大に其實績を擧げつゝあり、而して本年一月十六日夜、各學科を綜合せ午後七時より講話を開催せり。「開會」中島校長。「人生の要義」成島泰行師。出席者會員七十餘名。其他教員諸氏も出席盛會なりき。午後十時閉會。

●名古屋　一月八日午後六時より、中區丸林樓上に於て、古渡町在郷軍人の總會あり、同席上に於て、至誠を披瀝す、（日蓮魂と大和魂）有田宏道▲同日午後八時より、市内新榮町常德寺に於て、日蓮主義新年初例會を開催す、（實在に就て）村田義本。（佛教の實義）鈴木默庵。（中京信者の奮起を促す）有田宏道。（希望の光り）國友文學士。此夜の特に濃烈なる鄕氣は、身心鍛錬の爲自強の幸甚とする所なりき、十一時法悅裡に散會す。

●京都　一月八日午後一時、寂光寺婦人會。（婦人の修養、其一）萩原僧正▲九日午後一時、正行院婦人會、（婦人の修養、其二）萩原啓門▲十三日午後一時、妙滿寺婦人會。（新年の信仰）萩原僧正。（日蓮上人薩埵琵琶）津田旭鄕氏。餘興福引等あり數百餘

名盛況盛會なり▲十六日午後一時、成就院婦人會。（日蓮主義と生活）清水一乘▲十六日午後一時、法光院婦人會、（新年の佛教）金光孝碩▲二十一日午後一時本正寺婦人會。（開會の辭）金光孝碩。（日蓮上人佐渡御流罪）關田僧正、餘興として小林菊の謠曲羽衣。琴小林ちか子、吉川君子、竹本琴子、高田定子、尺八吉川延次等の諸氏が越後獅子、千鳥、大内山、亂春の曲等糸竹合奏其他編引ありて盛會。當日幹事小林つね子、磯貝つる子、橋きぬ子、小林竹枝子、本部光子、鈴木きよ子其他諸氏盡力せられたり▲二十一日午後七時、本山例會。（開會の辭）清水一乘。（除其裏悲令得安穩）萩原啓門。（日蓮及日蓮主義）關田日城▲二十二日午後七時、護正會例會。（開會の辭）木田金四。（佛教の眞髓）關田僧正▲二十三日午後七時、天晴會例會（開會の辭）西村喜一郎。（日蓮主義と根本思想）關田僧正▲二十八日午後一時、妙滿寺婦人會（信仰）三好信道、各會共熱心なる求道者多數盛會なり。

●大阪　一月十三日午後一時より東區西高津中寺町蓮成寺にて新年會執行、下の如きの講演あり△新年と勞働、鷲田顯正▲人間の幸福、梶木日種　二月一日午後一時より師寺にて新聞會執行、粗信徒の年中安泰を祈る、同夜七時より講演を公開す▲生活と宗教、鷲田顯正▲現代の要求、三好信道▲覺醒の年、齋藤義應▲佛教の要義、梶木日種

●堂闇寺　講演十三日澁阪所懸、增田名古四郎。新年と信念、齋藤義應。▲二十一日講演武士道、津田旭淞。雜佛琵琶、村上女史。津田先生。宗教の必要を論ず、齋藤義應。▲顯本講々演十八日木の本宅二十三日平山宅二十五日池田宅右京藤師出演。▲聖典講究會二十二日西崎宅檜本、笹川、長谷川、黑澤、齋藤各師出演頗る盛會なりき。

●明石　明石町に於ては川崎師透明なる信仰談を熱辯し、小笠原靜氏等之を援護し大に教勢を黙られつゝあり▲一月八日鄰公會堂に日蓮主義研究例會を開く。▲聖愚問答抄講義、川崎英照▲十日午後六時より同所に於て。法華經講義、同師▲十二日橋香會婦人會聯合大會あり、二百五十名の參聽者あり法益其大なり、終つて津田氏筑前琵琶あり。聖訓につきて、小笠原寂天。悲觀と樂觀、津田旭淞▲十七日明石驛前松竹堂に於て。自我偈講義、川崎英照▲十八日夜日蓮主義研究會あり同師出席▲二十日夜法華經講義會あり▲二十三日夜舞子小學校に於て綺譚講話あり。悲觀と樂觀、津田旭淞。宗教の必要に就て、小笠原寂天。根深ければ枝繁し、川崎英照。聽衆四百名に近く盛大なりき▲二十日午前九時より明石遊廓に於て娼妓の爲め修養會あり。婦人の本分、川崎英照▲二十四日明石檜屋町藥師寺宅に、御遺文講義、同師。

●備前　一月一日午前第七時より和氣本成寺於て國鳴會。去年改宗者の報告等終に庫裡にて一同祝盃を擧げ和氣學拜賀式參列▲四日和氣恒次留太郎宅（念力）原田日勇▲十五日婦人會決算報告賞勵者賞品授與編引の餘興を催したり▲十六日同信會開催（日本國と日蓮聖人）原田日勇▲二十四日頓宮慶太宅（念寫に就て）原田日勇。

●廣島

●妙詠寺　に於て一月十二日初會說教、左の演題來聽多數あり。（聖愚問答抄一節）島田顯知。（妙法記念號に付）長崎開達氏

●本照寺　に於て一月十三日　初會說教、左の演題來聽多數未曾有盛會。（現代の日蓮門下）大橋日疑。（顯天寬の現說）富元金榮。▲本照寺に於て十五日妙法會第二回の講會左の演題、當番幹事大橋日疑の開會辭。（四教義講義）島田顯知。（妙法會に歌き）島越鶴一。（妙法記念號）長高開達氏。（獨逸の戰爭談）深井守之助、十一時閉會。

●十七日本照寺午後七時より日曜學會。初集會（開會辭）牧野一夫。（青年の生活）橫田大佐。（青年自覺）大橋日疑餘興として劍舞多田正夫薩摩琵琶落語等。

●高等師範學校內の日蓮讃仰會　を第二會議室に於て。廿六日日蓮宗側より妙項寺住職項龍岳。顯本宗側より本照寺住職大橋日疑。本門寺側より長遠寺住職長崎開達等出席せり。（開會辭）理事伊藤康壽。（日蓮上人の眞實佛）妙項寺住職項龍岳。（宗教の大義名分に付）。（從地涌出品講義）大橋日疑（波木井御書一節）長崎開達。（閉會の辭）山田嚴雄。未曾有の盛會二月の列會十四日開會することを約し散會せり。

●神奈川　神奈川縣には日宗各教團を通じて寺院の數三百餘ケ寺、活動の舞臺としては四十萬の人口を有する本邦第一の貿易港たる橫濱市がある、其他橫須賀市等の樞要の地がある、寺もあれば働き場所もある、而るに現在の狀態は何たる情ない有樣ぞ、あらう、橫濱市などは動けば人の集まる處であるのに新運動に從事するものはない、各教團の當局者は、少しく時代の眼識を開いて何とか工夫したら如何なものであらうか、一人の運動でも熱誠を以て當らば、新らしい人々を佛子とすることは出來るが、萬事意の如くならざるを憾みとす。

▲一月八日午後二時鎌倉郡上飯田本興寺に新年初頭の講演會を開く、（人の力と事業）三上義徹▲十一日午後七時同郡中和田村和泉青年會新春總會に於て、（人は宗教なり）同上▲十八日午後三時橫濱本化唱導會主催の講演（身心の莊嚴）同上師▲二十一日午後一時橫濱長者町長壽軒に於いて橫濱公道會大講演を開く（皇道と日蓮道）同師。

この會は三上師が昨年八月創立したるもの、講演を開催すること僅かに七回なるも、既に有力なる二十餘名の青年が門下に加はるに至りしと、この日三上師の講演は二時間半に亘る大廣長舌なりしも、一人の退座するものなく、講演後門下となりしもの數名ありたりと▲二十二日午後橫濱村雲婦人支部講演開催（信仰の要義）兒島布教師。（家庭の力）三上義徹。（理想に生きよ）松森僧正▲二十八日午前十時鎌倉郡中和田村小學校友會春季總會開催（文明人たるの要件）三上義徹▲同日午後同郡上飯田本興寺に日什上人報恩會並に講演開催（信念と勝景）同師▲二月一日午後一時同郡中和田村中央青年會支部青年總會開催（立憲國民の修養）同師▲同日午後六時同村上飯田本興寺に金剛會總會を開催學校長農業技手の講演後（宗教化したる政道）同師。

●美作通信　十二月一日同信會例會同十三日勝田郡瓜生原谷口早太郎宅に於て能仁一十師の信仰談、同十五日苫田郡久田村婦人會總會を久田尋常高等小學校講堂に於て開催講師として同氏出席『家庭に於ける婦人の地位及修養』と題して講演此日會する會員三百五十名中々の盛會なりき。

●武田萬作氏逝く　美作津山に於ける強信の信徒武田萬作氏は大正五年仲秋の頃より不幸病阿の犯す處となり一族近親看護の陽りを蹙し一時恢復の曙光を認めたりしが如何せん天壽の定め然らしむる所か病勢遽かに革り大正五年十二月十八日午後十時十分道交道友が讃經唱題の裡に歸するが如く流涕從容として臨終せらる享年七十有三嗚これ笑に津山教壇の爲めに惜しむ可き事也葬儀は同月廿一日同山より能仁寺一師檀路より中川日史師會葬莊嚴の裡に擧行せり。

注意

本月は雜報編輯部の方へ三日までに着の分だけ掲げたり、其後のものは來月廻し。

新購讀者表

以下記出すものは近く新購讀者となつた人々であります。尤も此表の中に若し誤つて購讀御承諾のない人で記入があります

我『統一』は斯の如くして全國に普及され而して我主義の文書傳道の目的は達せられつゝあり此新購讀者加入に付、其勸誘諸君の盡力を謝す。

遠藤虎次郎君　戸谷好雄君　熊井本光君
笹川日堂君　成田與七郎君　草切信榮君
千葉縣酒井君　影山謙二君　前田日應君
鈴木鍵吉君　增田名古四郎君　京藤義應君
小笠原君　窪田純榮君　桑村儀三郎君
飯田連三君　田口玄猶君　田邊愼一君
猪又金太郎君　芝沼瑞良君　廣崎金十郎君
大橋武三郎君　小幡親正君　高木本願君
笹川玄山君　三橋會要君　中村日錦君
森下馨君　原田日勇君　海老津朝桂君
長尾猶之助君　山形君　春淨君
吉永日洋君　中村謙三君

北海道　德安耕村君　小石川小田政太郎君
橫須賀　諏訪小熊君　同遊津音次郎君
島根縣　原繁治君　小倉市本居惣市君
△右三、遠藤虎次郎君紹介　靜岡縣中岡青年會
介
△右六、戸谷君紹介
陸軍士官學校　山口飢夫君　埼玉縣有住晴函君
岩手縣　菊地吉五郎君　△右一、熊井君紹介
日本橋森田惠君

青森縣　山美重太郎君
出雲國　石橋長藏君
熊本縣　山本義耀君
橫濱市　鹽谷健藏君
△右五、笹川日堂君紹介
品川竹下龜太郎君
牛込區　保井保五郎君
△右二、戸谷好雄君紹介
熊本市　篠崎憲一郎君
岡山縣　櫻井亦男君
千葉縣　大久保平吉君
品川町　西山孫太郎君
△右四、笹川日堂君紹介
大阪市　武田萬次郎君
北海道　小玉瀧吉君
同　石川チヨ子樣
△右三、成田與七郎君紹介
名古屋　山本該三君
同　池田重次君
△右二、草切君紹介
千葉縣　綠川了君
△右一、酒井君紹介
新宿　大井與一君
日本橋　栗山印刷所
廣島市　增田信一郎君
△右三、影山謙二君紹介
千葉縣　清宮勝太郎君
△右一、前田日應君紹介
東京　勝山いし君
淺草區　野島連平君
同　萬屋常七君
山梨縣　桑村彌一君
岡山縣　池畑幸太郎君
△右五、影山謙二君紹介
芝區　鑑屋三之助君

△右一、鈴木鍵吉君紹介
北豐島郡　鈴木辰次郎君
本所區　安藤久造君
△右二、增田君紹介
京橋區　井上清君
岡山縣　山本銀次郎君
△右二、影山謙二君紹介
朝鮮　黑澤音善君
千葉縣　牧野鐵太郎君
下谷區　勝岡信君
大阪市　西崎荒物店君
△右四、京藤君紹介
淺草區　篠崎芳子樣
廣島市　大木幹夫君
△右二、影山謙二君紹介
群馬縣　赤石武一郎君
△右一、小笠原君紹介
千葉縣　小安傳重郎君
鳥取縣　瀨戸兵藏君
△右二、窪田孤松君紹介
岩手縣　石合幾三郎君
牛込區　佐々木省三君
荏原郡　中市松君
新舞鶴　西野米藏君
△右四、桑村儀三郎君紹介
荏原郡二子澤繁子樣
鳥取縣　杉浦伊三郎君
和歌山　植松新十郎君
△右三、飯田連三君紹介
和歌山　武田秀君
丹後國　井本俊藏君
同　鹽見保治君
△右三、田口玄猶君紹介
宇都宮　梶巢君
△右一、吉田惠隆君紹介

統一　發送部
會計部

千葉縣　幸田　和助君
同　飯沼德次郎君
△右二、田邊慎一君紹介
廣島市　荘　保二郎君
岡山縣　花岡祐太郎君
同　小川芳次郎君
△右三、影山謙二君紹介
牛込區　田川金太郎君
△右一、猪又金太郎君紹介
下谷區　山木肚太郎君
小石川　久保　眞七君
△右二、猪又君紹介
京都市　澤村幸次郎君
下谷區　岩滿仲太郎君
栃木縣　柳田　利市君
同　水沼教會所君
△右四、芝沼瑞良君紹介
大連　平田　包定君
△右一、廣崎金十郎君紹介
大阪市　小杉小二郎君
巢鴨村　久保田萬壽郎君
日本橋　坂下利三郎君
△右三、大橋武三郎君紹介
千葉縣　本　顯　寺君
同　戸村　啓藏君
△右二、小幡親正君紹介
岡山市　岡　繁也君
△右一、影山謙二君紹介
京橋區　青名　孝二君
△右一、高木君紹介
高松市　日蓮主義研究會
大阪市　橋本　眞岳君
△右二、笹川玄山氏紹介

靜岡縣　直　井君
△右一、三橋會憂君紹介
熊本市　大和　千尋君
大分縣　柳　井君
千葉縣　齋藤　郁郎君
千葉縣　二村雄一郎君
△右四、中村日錦君紹介
大阪市　俵屋　定吉君
兵庫縣　衣川彌太郎君
△右二、森下馨君紹介
大阪市　逸身佐兵衛君
靜岡縣　本庄寅太郎君
岡山縣　森定　永久君
△右三、原田日勇君紹介
千葉縣　赤地龜太郎君
△右一、海老津朝枝君紹介
小石川　伊藤上下松君
△右一、猪又君紹介
廣島市　中下　行學君
大阪市　和田龜之助君
△右二、長尾君紹介
丹波　平野吉左衛門君
京都　桑原源次郎君
千葉縣　錦織　平作君
△右三、山形君紹介
小石川　川俣　憲藏君
越前　森川　茂君
△右二、奉靜君紹介
大阪　木ノ木京子樣
△右一、京藤君紹介
姫路　射場　愈次君
△右一、吉水日洋君紹介
小石川　寺門　信重君
同　秋山　萬吉君
朝鮮　永見　京造君

深川區　高島　末吉君
神田區　天野　換三君
麹町區　杉山　齋五君
秋田市　齋藤　鐵治君
△右七、中村謙藏君紹介
東京府下　石村義和君
淺草區　小久保晴吉君
香川縣　尾崎　日暉君
淺草區　栗田　長藏君
本郷區　熊澤　やさ樣
日本橋　木間　鄉夫君
淺草區　山田　直助君
同　大竹　大平君
同　稻垣平十郎君
同　龜　清　樓君
同　辻村龍之助君
下谷區　三橋　吉勝君
同　渡邊　義翁君
本郷區　田野庄之助君
同　加藤產太郎君
同　金親豐次郎君
同　川之邊一明君
同　酒井喜平治君
深川區　藤　鐵五郎君
同　山口　兵彌君
福口　幸助君
植木　殘吉君

深川區　小林吉五郎君
同　宮崎久次郎君
同　鷲　源八君
同　中山喜太郎君
同　小林　元吉君
同　古市藤兵衛君
同　野口辰之助君
同　古關　庄作君
同　內山喜三郎君
同　小山　和助君
同　笠木利兵衛君
同　安藤　喜助君
同　並木　國松君
同　野口　敬藏君
同　鎌木　嘉助君
京橋區　山岸喜藤太君
同　中北　庄吉君
同　河元九十郎君
同　上村　龜吉君
蠶區　幸松　武雄君
同　岩瀨梅次郎君
同　梶山富次郎君
同　古谷　定吉君
同　渡邊　光尊君
横濱市　饗場　安吉君
同　服部藤左衛門君
日本橋　松本　利平君
同

●生徒募集

一、豫科普通科
一、本科哲學科

右入學生ヲ募集ス志願ノ者ハ三月二十日迄ニ本校（出願スベシ）

東京府下雜司ケ谷

大正六年二月　顯本法華宗大學林

統一俳句　課題發表

○桃

子を這はす莚の上や桃の花　肥前　天岳
村人の努力の花ぞ桃の里　舞鶴　琴友
素通りは桃か許さぬ句友哉　播磨　香雄留
瓢をとりて桃の花天地に滿つ　同
溯る谿の流れや桃の花　駿河　松蔭
桃咲くや下戸には下戸の酒もあり　千葉　龍北
桃咲くや藁屋ちらほら江の南　同
船宿に桃の盛りや京の客　越前　春淨
里の子の遊び所や桃の花　長崎　壽山
桃の花挿して小きお客哉　白山　周女
あき屋敷桃の花の盛りかな　大阪　同
碑の文字に讀ぬ字もあり桃の花　京都　直水
旅人の笠にちるなり桃の花　不二子
手入した袋新し桃畑　駿河　松雪
新紙持つ翁桃林に背しごく　淺草　洽地

○佳品

くず屋四五店出すもあり桃在處　名古屋　鵲園
桃咲くや鳥居のほとり子守唄　淺草　洽地

牛に乘る村の小町や桃半里　千葉　蓮水
白桃や欅片寄る岨の畑　君津　勉之
桃の里仙境に似たる家もあり　伯耆　孤松子
桃咲や貸地の札の立處　大阪　直水
靈丹を練る里暖し桃の花　潤井戸莊　夢
伊達若衆髮に艶あり桃の花　名古屋　麗陽
森もるゝ壁白き家や桃の花　肥前　天岳
のつそりと牛の行くなり桃の里　日本橋　鐵橋

▲評　但し大きなのが一本なりと知るべし

やれ壁や馬の顏出す桃の家　茂原　玉城

▲評　何といふ良い句でしよう、こんな句を得たい得たいと戀ひ焦れて居ました、敬服、是れ秀逸

○評者の句

土橋から桃の村あり犬の行く

前號『初霜』は『初霞』の誤植でした。しかし刷れて後には致方もないて其儘にすました。

○初霜を拾て鬼打つ番匠哉　夏目　蓬水
○初霜や浮木をあゆむさむ鴉　笹川玄山
○初霜や石數きつめし神の庭　吉川玉城
○初霜や大根つるす寺男　陣內天岳
○初霜や捨てある馬子の草鞋より　堀江得一郎
○初霜や水物買はず草の息　同
○初霜や遊はぬ約を橋に書く　春　淨

▲評　酒で爛酒呻りけり春寒
新人の舊元日に句會かな
山寺に人の聲なし春寒し
その頃は我は廿か藪飾り
春寒や號外出たり越の雪
春寒き亀井戸詣て戻り船
老僧の頭巾危く春寒し
支那そばや貼紙をしてお正月
春寒やどのスタイルもくの字にて
うすら寒き春の夜を曾茶釜たく
御代の春思出深き武者小路
皮羽織奴に持して春の月
元日や嬰兒正坐して提箱
七五三張れる苫から煙る日の出哉
春寒し頬杖ついて川の面
春寒み灰に文字書く日暮哉
口嗽ぐ御手洗水や春寒し
鳥道や昔は磯多の長者哉
橋供養一番太鼓や春寒き
春寒む銀燭冴えて影晴し
春寒や一際目立つ下女の頬
笛吹の袖口廣く春寒し
春寒や宵提灯の二つ行
右の互選に鼓城は與らず、牛歩君選のみ與る。鼓城君は遅れて發會。

次の題『春の句』（隨意）

投句處　東京市小石川區白山前町一七統一編輯所

▲場所は統一附。日は一月廿三日薦正月元日。會する者左の如し。

山根　青村　篠田　鐵橋　松尾　鼓城
高木　洽地　山中　慶山　木村　白藤
熊井　鷺城　志野　咲香　日高　牛歩

▲選は互選　自一點至三點

題　正月　春寒

1 青村　1 洽地

右副評　鼓城選

勸當の子や今何處春寒み　3 青村
若水を鱗の綠やはね釣瓶　3 周女
元日や嬰兒正坐して掘り箸　3 咲香
春寒や號外出たり越の雪　1 青村
老僧の頭巾危く春寒し　1 鐵橋
支那そばや貼紙をしてお正月　2 洽地
春寒やどのスタイルもくの字にて　2 青村
橋供養一番太鼓や春寒き　2 慶山
口嗽ぐ御手洗水や春寒し　3 慶山
七五三張れる苫から煙る日の出哉　3 咲香
元日や嬰兒正坐して掘り箸　3 周女
新人の舊元日に句會哉　1 咲香
春寒や號外出たり越の雪　1 青村
老僧の頭巾危く春寒し　1 鐵橋
支那そばや貼紙をしてお正月　2 洽地
春寒やどのスタイルもくの字にて　2 青村
橋供養一番太鼓や春寒き　2 慶山
口嗽ぐ御手洗水や春寒し　3 慶山
七五三張れる苫から煙る日の出哉　3 咲香
元日や嬰兒正坐して掘り箸　3 周女
若水を鱗の綠やはね釣瓶　3 青村
勸當の子や今何處春寒み　3 青村

春寒み灰に文字かく日暮哉　3 咲香
笛吹の独口廣く春寒し　3 鐵橋
〈評　風て独口の廣いのであれば私は頂きませぬ
灯影ならび若水の桶白し　3 鐵橋

即興題　春の宵、白馬

小蝶の七草きざむ音寒し　洽地
月朧隣村迄行かんとす　白藤
河岸堤を劇の噂や春の宵　鷺城
春の宵法華經一字一石塔　鐵橋
春の宵祖母のかたみの一絃琴　咲香
神前の白馬老いけり春祭　鷺城
白馬潜り金鞍の公子春男む　青村
（其他二三佳句ありしも失へり）

□祝して寄

納税のベラの舞込む元始哉　千葉龍北
門松も二度の勤めや新と舊　同
新らしき下駄の並ぶや松の内　岡山化城
塀越に鉢の木を開く餘寒哉　同

■次回

二月廿三日午後四時統一開に於て。

題　涅槃會　春の鳥

句相撲　行司

こんな苦情の多い相撲の行司ほど辛いものはございません。眼の高い見物人の鐵橋さんの見たところと一致して居ますものは鐵橋さんの批評に任せ、其外のものだけ説明致します。

句相撲評　鐵橋駄評

1 東勝
2 君が天地の大いなる四十八手裏表自由自在なる横綱振りには西の法花經の一節を借りて僅かに一手を出したるが如き比す可くもあらず

▲行司曰く　相方とも少し相撲道に忌み手あり片や痛手ありて預り

3 西勝
4 並び行くの四字雖ありて腰弱く列を正して堂
5 堂たるに敵し難し
6 東勝
醜態をはね飛ばされても驚きもせず土俵際に踏み耐らへ島田に溢面を作りたるより上手な

▲行司曰く　相撲は手先にて散々秘術を盡せども一人は手を突き又片やに踏切りありて預り

7 西勝
8 剣の峯より突き飛ばされたる憐れより武者絵の力あるを喜ぶ
9 何れも二段以下の相撲にて
10 同體落行司預り
11 東中々の妙手を振ひ西寄付
12 東く遠も無し只此の妙手の手の他にあらんかを疑ふものなり
13 東の無遺作なる取口よりも
14 西の用意周到なるに及はず

▲行司曰く　有力と上手と四に組み引分となる

15 双方互角の相撲にて容易に
16 西勝　勝を決し難きも鮪よりも魚の腐きを取りて西を勝とす

▲行司曰く　羅退前の兩力士何れも大事を取つて四つ引分となる

17 太刀山の如く鐵魂の一手なれども母の乳房に喰ひ下る
18 東勝　一手もありて西の秘手も施すに術なく自然に押出されたり

又秋月麗陽の評は略す

▲句相撲に就て　來月は只春の句、力士の登場も多かるべく、見合つたものゝ好取組を御覽に入れ可申候。

本誌『統一』定價並に廣告代價

○一冊八錢。郵送分は別に五厘申受候
○前金送金分に限り郵送料申受ず候
○代金未濟の方へは六ヶ月目乃至一ヶ年目毎に御便利上集金郵便差上ます（但此場合郵便局手數料五錢加算仕るべく候）
○故に郵便送り當方より集金のものは半ヶ年五拾六錢、一ヶ年壹圓七錢申受候
●送金は振替貯金口座東京三三五三三番統一編輯所に御拂込を乞ふ（もよりの郵便局にて御拂込み下され度、確實に御座候）小爲替は紛失のおそれが有ます
●領收證は特に御請求以外は本誌上に表として取纒め掲載します
●廣告料は一頁特別十五圓。半頁八圓五拾錢。三分一頁六圓。
▲五號活字十八字詰一行二拾五錢
●交換及び義務廣告はお斷り申候

▲御注意

●多數中の事に付若し雜誌不配達の節は御一報を乞ふ、早速御送本可仕候
●當方より集金郵便差上候節、多數の事に付計算相違、又は二重御請求等の手違ひ候節は御面倒ながら御一報下され度願上候
●集金郵便差上候節、何かの御都合にて御拒絶の方も有之候へば、其の節は御放任なく葉書にて一寸其旨御報下されの節も一寸御一報下され度早速蠶帳拒絶の後は不用の節も取消の事に付御送本申上候。又御引換御請求の節は其の節も一寸御一報下され度早速蠶帳
●多數の事に付御返事は往復はがきの以外は御返事仕ら
●諸君の熱心御協力に依り我統一が宗教雜誌界中に於て最大の發行中に依り我統一が宗教雜誌界中に於て最大の發行中に數へらるゝに至りしことを謝し申候

●前號廣告中妙滿寺其他年賀祝詞廣告御校正の方にて全く印刷所と依頼の分掲載洩に相成り、打合せに付爰におことはり申候
▲前號の間違中にて發句の初霞が霜となり、冊日〆切が二十日となり。統一和歌俳句集（四）の處本月末迄とするところが十月と誤る、イヤ數字の間違と課題の間違つたのとは取返しがつかず校正係候

日蓮宗法衣專門
青雲帽　帝釋服　袴
飯田法衣店
京都市佛具屋町五條北
振替口座大阪六八四七
定價表ハ御申越次第何時まても御送申上候

●位牌木魚卸小賣
●御來店之節ハ陳列場へ御來車被下度是迄トハ一層勉强仕リ
●佛具一切陳列仕置候●

各本山御用達
佛像佛具
一切卸小賣
定價表郵税四錢
小賣部　京都三條小橋東入南側
三法堂佛具陳列場
長距離電話中貳七八參番
振替口座東京貳〇七壹
大阪四貳五九
卸部　京都市三條通小橋西入
本舗　三法堂　藤田總治

第廿一年　統一　四月號

統一

（第二百六十六號）

課題和歌「行路鶯」發表……子爵　清岡長言選
社會問題と我國の思想界……大僧正　本多日生
宗教心地に住せる者より觀たる選擧戰……赤塚　健
大藏經要義第一卷を讀む……文學士　小林一郎
宗門史考（續）……僧正　笹川日堂
機微譚語……山根靑村
祖師日蓮聖人御傳……一記者
釋尊降誕會（花御堂法要）……一記者
大藏經要義献納祈願會……一記者
統一俳句欄……統一團報……其他數件

發行事務取扱所　東京小石川白山前町　統一編輯所
◀振替口座東京三三五三三番▶

大正六年四月十五日發行（毎月一回十五日發行）　三十年二月二十四日第三種郵便物認可
統一　東京市小石川區白山前町　統一編輯所

▲再版出來○○○
●卿は全國の新聞の批評を見しや
△本書に對する▽
大僧正　本多日生著
法華經講義　全二冊
▲洋裝菊版總布上製函入美本
上卷　壹圓八拾錢（壹千頁）
下卷　壹圓八拾錢（壹千頁）
●各卷分賣す
●二冊の小包料（內地二十錢、滿洲朝鮮五十錢　臺灣樺太四拾錢）
●一冊の小包料（內地十二錢、滿洲朝鮮四十錢　樺太臺灣三十錢）

大僧正　本多日生著
日蓮主義
第一版、二版忽ち賣切三版
三五判洋裝金文字入▲天金綾函入美本▲紙數六百二十餘頁
▲定價九拾五錢　郵稅六錢
▲宗教の必要と其撰擇▲神儒佛三教と日蓮上人▲國民道德と宗教の信仰▲攻佛論に對する批判▲統一的佛教觀▲釋尊の出家感道▲佛教信仰の體系▲法華經壽量品▲日蓮主義の梗概▲修法次第▲方便法▲自我偈▲自訓▲本統觀文要文
●賣り切れざる中に申込あれ
申込所　東京市小石川區白山前町　統一編輯所
振替口座東京三三五三三番

●日蓮各宗寺院御僧
法衣　草木
京都　三條通烏丸東入ル町
直に御聯想下され候儀に候
草木本店
電話中七三五番
振替口座東一一五五九番
淺草區三好町二番地
草木支店
電話下谷三四三四番
振替口座東二四五六八番

東京市日本橋區坂本公園入口
加賀料理
加能亭

●念珠
日蓮各宗本山御用達
京都市寺町通六角西南角
念珠商　安田商店
二百數十年日蓮各宗の念珠を商ひ來り候老舗に候御信用の上御用命願上候

●念珠
佛像佛具
位牌木鉦
調度所
宮殿憧天蓋其他一式
▲普通品定價郵券貳錢封入送呈
總本山身延山
總本山妙滿寺
大本山本國寺
日宗各教團
御用達
京都寺町四條南大雲院前
舊名「乾清」事大佛師
辻井岩次郎
振替大阪八一五七番
電話下三二五八番
多少に限らず御用奉願上候也
●苟も神佛具を調製する敬虔心を以て奉事仕候
●御用仰せ被下候はゞ丁寧深切を旨と致候

圓頓章講義
四十五錢　郵稅八錢
日野村秀香寺
福井縣南條郡
振替大阪三二三三一番

日蓮宗各本山御用達
顯本法華宗妙滿寺御用達
御念珠各種
弊店の特色は實用を旨とし從來調進仕り候へば多少に不拘御用命願上候
市都市寺町通蛸藥師下ル
念珠商　小野嘉助
振替口座大阪一九七二〇番
念珠ならば小野嘉助店へ

▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英四郎△印刷人鈴木日雄（八錢郵稅五厘）▼
（東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍印行）